

素顔 '88

(10)



女史とマダム

K. Labitzke and M.L. Chanin

88年の盛夏、北欧はヘルシンキ湾上の遊覧船でビールを飲みながら美女二人と歓談。

まずはカーリン・ラビツケ女史(写真右)。ベルリン自由大学気象研究室をあずかる大姐御。成層圏突然昇温現象発見者たる故シュルハーク教授の一番弟子。シュルハーク亡きあと、この20年間、彼の学風を最も良く受け継ぎ、総観的にしろ統計的にしろ、成層圏データを扱わせては彼女の右に出る者は無い。最近ではデータ解析のみならず、K. Roseをはじめとする若手モデラーの育成にも力を注いでいる。

国際的な知名度は抜群。ジム・ホルトンいわく“大きな国際会議でカーリンの居ないものはない”。その通り、IAMAPのVice-President。MAPで大活躍の後、STEPでも中層大気研究の発展に意欲満々とみた。

大の親日家。これまで訪日は数回に及ぶ。それもそのはず、“1/8日本人”を自称するのとおり、曾祖父は文政5年生まれの西川里三郎という歴とした浅野家の家臣。

西ベルリンの自宅には、当時をしのばせる遺品がいくつか保存されている。

かたやマダム・シャナン(写真左)。“ボンジュール、マリー”と肩を寄せればほのかに漂うエルメスの香り。ソルボンヌ(現パリ大学)で物理の学位を取ったあと、リモートセンシングによるナトリウム分布の研究等をはじめに、70年代からMAP期間にかけて、CNRSのHaute Provenceで大型ライダーを駆使し中層大気密度測定に成功、通常のISレーダーでは測れない高度30~80km領域の重力波解析に独自の優れた貢献をしている。観測部長の要職にあつて自分の研究のみならず、A. Hauchecorne, R. Wilsonなどの後継者も育ててきた。日本のライダー観測も彼女の仕事に教わるところが大きい。

1984年の京都MAPシンポジウムの折に来日。そのレセプションでは堂々とフランス語で挨拶したが、講演のときのやや鼻にかかったフランスなまりの英語も魅力十分。

何事につけ対比されるドイツとフランスだが、この二人、きわめて仲が良い。最近では連名でsolar cycleと中層大気長期変動に関する論文を発表している。

もうひとつの共通点は、二人とも国際気象界きってのベスト・ドレッサー。ラビツケ女史は、西ベルリンの目抜き通りクーアフェルステンダムにブティックを経営する旦那マイケルの影響で派手な色彩を好む。(そう言えばベルリン天気図も赤黒緑の配色が鮮やかである)。これに対しマダムのほうはもちろんパリモード。ディオールとおぼしきシルクサテンをサラリと着こなす。二年前御主人をガンで失った未亡人にはとても見えない。

中身があればこそ外見も映えようというものである。近い将来、この二人のように国際舞台で華麗な舞いを見せる日本人女性が次々と現われることを期待したい。

(京大・理学部 廣田 勇)

「天気」Vol. 35, No. 11, 701ページ左側上から12行目講演企画委員のうち掲載もれがありましたのでここに改めて掲載いたします。

滝 良二, 露木 義, 万納寺信崇

以上の方を追加いたします。